



図 3-1 1987年における水稻の生育状況
(前年と比較)

劣った。

なお、10a当たりの所要労力は11.2人で、過去5ヶ年間の平均よりも2.5人ほど多くなった。

2) 畑作物および果樹 (表3-2, 図3-2)

当農場における主要畑作物の昭和51~61年の10a当り平均収量は、アズキ…92kg, ダイズ…168kg, バレイショ…1,261kg, ゴボウ…1,419kg, ニンジン…1,358kg, ウメ…66kg, デントコーン(サイレージ用)…3,540kg, オオムギ(サイレージ用)…1,634kgである。

(1) アズキ 6月16日に在来種を播種し、10月21日収穫した。発芽、初期生育はほぼ順調であったが、8月中旬の開花初めに多雨、寡照が続き、その後も日照時間の少ない日が続いたため、最終収量は93kg/10aと平年並みであった。圃場別に収量をみると、前作がデントコーンの2号圃場は、連作で一部湿害を受けた3号圃場より2割程収量が高かった。又、岩手、山形、新潟で奨励品種となったウイルス抵抗性の大きい紅大納言を試

験的に栽培したところ、在来種に較べて収量はほぼ同じであったが熟期が2週間程早かった。

(2) ダイズ 品種としてはスズユタカを用い、6月8日に播種し、11月4日に収穫した。アズキとほぼ同様な生育経過を辿り、収量は平年よりやや良い183kg/10aであった。

(3) バレイショ 品種としては男しゃくを用い、4月20日に植え付け、8月20日に収穫した。本年は霜害にもあわず、生育中期の6月上~中旬に好天が続いたこともあって極めて順調な生育を示した。又、8月上旬の気温が3.3℃も低く、例年なら黄化、枯死するこの時期も依然として緑色を保ち順調な生育を続けた。従って、例年より生育期間が1ヶ月近く長くなり、収量は2,259kg/10aと過去11年間では2番目に高い値であった。また梅雨明けが8月9日と大幅に遅れたにも拘らず、腐れも少なく高品質であった。品質を芋の大きさでみると、大が21%, 中30.4%, 小26.2%, 屑22.2%と中以上が半数以上を占めていた。

(4) 根菜類 本農場の土壌は強酸性黒ボク土であるため、酸性に弱いゴボウ、ニンジンも収量的にも品質的にも極めて劣っている。そこで本年は、深耕ロータリーで45cmまで石灰中和して栽培した。播種はゴボウが5月14日、ニンジンは6月11日に行い、収穫は11月18~19日に行った。ゴボウ、ニンジンの発芽、初期生育は順調であったが7、8月の多雨、寡照により、湿害やウドンコ病の発生が著しかった。この為、ゴボウ収量は724kg/10a、ニンジンは1,150kg/10aと平年値を大きく下回った。しかし、45cmまで酸性矯正したので、ゴボウでは上物が75%、ニンジンでは59%と品質の改善が見られた。

(5) ウメ 越冬前の10月中旬~11月下旬は低温であったが、越冬期間中は平年並みの気温となり降雪量が著しく少なかったために花芽の発育は良好であった。しかし、梅の開花結実に最も重要な4月中旬~5月上旬が異常な低温となったため、雌蕊の寒、霜害、幼果の発育不良による落果が著しく、壊滅的な被害をうけた。その結果、収量はこの5年間で最も少ない24kg/10aであった。

表 3-3 ササミノリの収量構成要素 (前年と比較)

年次	m ² 当穂数 (本)	有効茎歩合 (%)	1穂当粒数 (粒)	m ² 当粒数 (×10 ³ 粒)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)	精玄米重 (g/m ²)
1987	548	64.1	62.2	34.1	84.0	21.0	601
1986	513	74.5	61.0	31.3	80.2	22.0	552

(注) 移植期: 5月16日, 側条施肥 (塩加磷安)